

「応用哲学・分析アジア哲学参加報告書」

京都大学文学研究科修士1年 山森真衣子

1. 学習成果について

今回の派遣に参加する以前から（長期の）留学を行いたいと考えていたが、今回の派遣を通してその思いが一層強くなった。その理由は以下の二点である。一点目は、国外にあることで自分と似た関心を持つ人々、自分と似たテーマを研究する人々と出会うことができるということが強く実感されたためである。日本だけを見ればいないような人々も、国外まで目を向ければ、いる可能性が格段に向上する。本派遣のおかげで、このことがただの理想論なのではなく実際にそうなのだと分かった。特に陽明大学では、手法や観点は違うものの自分とほぼ重なるトピックについて研究をしている教授と知り合うことができた。二点目は、今後研究を進めていくにあたって必要不可欠であるところの語学力（特に英語の能力）が否応無しにも向上するからだ。どの分野の研究もそうであろうが、日本語でコミットできる領域と英語でコミットできる領域は比較にならない。すなわち研究において英語の能力は不可欠である。本派遣のように、英語を使わざるをえない状況にあることで、その能力は向上するということが再認識された。

2. 海外での経験について

台湾の人々は皆親切で、今回の派遣でも彼らに幾度か饗された。清華大学では大学近くのパブに連れて行ってもらい、政治大学では台湾のお茶会に参加させてもらった。陽明大学では教授御用達のレストランやナイトマーケットを楽しんだ。台湾の文化、台湾の学生の文化に触れることができた。上述したように人々は親切であるが、現地には英語の通じない人々（特にタクシー運転手など）も少なくないため、コミュニケーションに多少の不便は感じられる。伝えたいことを中国語に翻訳したものをあらかじめ用意しておくことと便利である。

3. プログラム内容

今回、台湾の三つの大学で活動を行った。新竹の清華大学では、現地の院生と自身の研究について紹介しあった。また清華大学では日本語授業に授業者という形で参加させていただいた。台北の政治大学では、アジア哲学についてのワークショップに出席した。京都大学からは私を含めて三名がプレゼンテーションを行った。陽明大学では哲学一般についてのワークショップ（ワークショップの名前は「on mind, language and art」となっているが。）に出席した。京都大学からは私を含めて四名がプレゼンテーションを行った。どの大学でも様々な議論が交わされており、非常に有意義であった。

4. 進路への影響

アジア圏においても英語による高度で活発な議論が行われることを鑑み、哲学研究のための留学は欧米圏に限定されるべきではないということを実感できた。同時に、そのような活発な議論によりコミットするためにも、語学力の向上が早急の課題であると痛感させられた。